

Le Mariage dans la littérature du XIX<sup>e</sup> siècle

19 世紀フランス文学における結婚

Mémoire de fin d'études  
au  
Département de la littérature française  
de  
l'Université Sophia

présenté par  
Saki AKASHI  
2012

## 目次

序論	……2
第1章 バルザック『結婚の生理学』に読む結婚の原理と研究方法	……4
1.1 生理学とは何か—『結婚の生理学』のねらい	……4
1.2 結婚の問題と具体的研究	……7
1.3 『結婚の生理学』が現代に語りかけるもの	……9
第2章 文学作品における「結婚」	……12
2.1 少女時代と教育	……12
2.2 結婚と社会生活—夫婦という単位	……17
2.3 子供の役割	……22
第3章 19世紀—現実の結婚	……26
3.1 裏社交界の結婚	……26
3.2 「書く女」と結婚	……30
3.3 民衆における結婚	……35
結論	……39
参考文献リスト	……42

## 序論

バルザック(Honoré de Balzac, 1799-1850)は著作を通し、「あらゆる人間の知識のうちで結婚の知識が最も進んでいないのだということに、自分が真先に気づいたように思った<sup>1</sup>」と述べている。バルザックの生きた時代から200年ほどがたった現在、結婚しない選択をする若者は増えた。日本では「婚活」という言葉が流行し、結婚が殊更に特別なものであるように扱われている。フランスにおける離婚件数は2010年には13万3千件<sup>2</sup>、日本では23万件<sup>3</sup>である。この数が多いか少ないかは別にして、年間およそ20万ものカップルが“破綻”を迎えるこの結婚なる制度がはたしてよく研究され発展した制度だと言えるのだろうか。

19世紀には多くの結婚が文学作品の題材となっているが、この時代なぜ作家たちは結婚を描いたのだろうか。また、人間の本質的な問題を抱えている「結婚」がなぜ「最も進んでいない知識」であるのか、19世紀の人々と社会が現代に伝えるヒントはなんだろうか。

18世紀にはフランス革命以降生まれたといわれるフェミニズムや人びとの生活や精神の変革が起こった。それらを受け、19世紀の文学では多くの「結婚」が描かれている。二人の少女の半生の比較を描いた『二人の若妻の手記』(*Mémoires de deux jeunes mariées*, 1841) 主婦の憂鬱と不倫を描いた『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*, 1857)など現在でも読み継がれる作品になぜ結婚が描写されるのだろうか。また、作家たちは結婚をどのように描き、何を表現しようとしたのだろうか。文学作品は虚構であるが、時代の証言をすることができるだろう。

まず第1章では、新しい社会観察の方法を用いて書かれたバルザック『結婚の生理学』(*Physiologie du Mariage*, 1829)の手法をもとに当時の結婚の諸問題について分析を行う。「結婚とは果てしない闘争である<sup>4</sup>」という命題に沿いながら、現代にまで続く闘争と比較してゆきたい。

---

<sup>1</sup> バルザック『結婚の生理学』、安土正夫・吉田幸雄訳、東京創元社(バルザック全集 2)、1973年、11頁。引用は本来原文、和文翻訳載せるが、本論文では特定のキーワードや文章のニュアンスなどを紹介するために用いる場合を除き、和文翻訳を使用する。

<sup>2</sup> INSEE 調べ、2010年。

<sup>3</sup> 厚生労働省調べ、2011年。

<sup>4</sup> バルザック、同上、24頁。

第2章では、1章で行った当時の結婚にかかわる諸問題を踏まえ、文学作品に取材しながら、当時の結婚の「当事者たち」の証言をもとに分析と研究を行う。少女時代の教育が結婚生活に及ぼしうるさまざまな影響や社会生活としての夫婦生活、妊娠や夫婦の子供の存在について考察しながら、仮定的に幸福な結婚のありかたについて考えてゆく。

第3章では、2章での考察を踏まえ、19世紀前半に実在した人びとの結婚の例を挙げながら、より社会での結婚の役割について考えてゆく。いわゆる裏社交界における結婚についても触れる。

このように、生理学、文学からの取材、実在の人びとの分析という三つの面から「なぜ結婚が“描かれる”のか」について考えてゆく。現代にまで問題が残り、もっとも進んでいない知識といわれる結婚について19世紀という特定の時代から普遍的な真理の一端を探しだすことがこの論文の目的である。

## 第1章 バルザック『結婚の生理学』に読む結婚の原理と研究方法

本章では、バルザック『結婚の生理学』をもとに、生理学、19世紀の結婚の問題、作品が現代に語りかけることについて考えてゆきたい。

### 1.1 生理学とは何か—『結婚の生理学』のねらい

1829年に発刊された、バルザックの作品は、一言で要約すると、「結婚している男性が、もしくは結婚しようとしている男性が妻の不貞を防ぐための手引書」である。1881年にエミール・ゾラ (Émile Zola, 1840-1902) がフィガロ紙にブルジョワジーと不倫に関する数ページの記事を書いているが、バルザックのそれは300ページ以上になる。当時『○○の方法』や『○○法典』といったハウツー本が次々と出ており、『結婚の生理学』も最初、『夫の法典 または妻を貞淑にする方法<sup>5</sup>』といったタイトルになるはずであったが、当時医学や科学的タイトルが流行していたため『結婚の生理学』と名づけた。この『生理学もの』の流行が起こるのは発刊から10年以上後の1840年代である。

タイトルに選ばれたこの生理学を単純に偶然か当時の流れによるものと受け取り、この作品に現代の大衆的週刊誌に載っているような「不貞の回避」のような内容を期待するのは間違いであろう。この作品が「生理学よ、お前は私に何をしろというのか<sup>6</sup>」の一文で始まるように、このタイトルにこそ、この作品の目的と性質が表わされているのである。バルザックが自らの作品に医学要素を取り入れるに際し、彼は「この時代の医学の大きな転換が、生理学という学問に全く新しい意味合いを付け加えるに至ったことは、敏感に察知していただろう<sup>7</sup>」と言われている。バルザックの時代の医学の転換は「解剖臨床的医学<sup>8</sup>」と呼ばれ、人間の身体に現れる症状の観察を行うことで身体内部の疾患や状態が精密に特定できるようになった。こうして、「身体に対するとらえ方が、(…)19世紀前半の医学においては、身体内部の病気の読解が、より全面に出されることになる<sup>9</sup>」とされていた。

<sup>5</sup> バルザック『結婚の生理学』、305頁。

<sup>6</sup> 同上、19頁。

<sup>7</sup> 松村博史「『結婚の生理学』の教えるもの」、日本バルザック研究会、『バルザック 生誕二百年記念論文集』所収、駿河台出版社、1999年、275頁。

<sup>8</sup> 同上、276頁。

<sup>9</sup> 同上、277頁。

この手法を用いて書かれたのが『結婚の生理学』であり、結婚や夫婦という「身体」を解剖してこと細かに調べることで、「病氣」である不貞の発生、原因、予防について研究し、夫婦の幸福である「健康」を目指す目的である。『結婚の生理学』内の「夫婦に関する教理問答」には、「男は解剖学を研究し、かつ、すくなくともひとりの女を解剖した後でなければ結婚してはならない。<sup>10</sup>」とある。次では、バルザックの勧める「解剖学」をもとに、夫婦の問題を考えたい。

それでは、夫婦の幸福のためにバルザックが丹念に「不貞の防止」を掲げるのはなぜだろうか。背景にはバルザックの母親が自分よりも不貞の結果に生まれた弟のほうにより愛情を注いだことへのトラウマがあることが考えられるが、結婚における「病氣」たる不貞は同時に、「社会的問題」であるとし、「われわれはその諸原因が、法の不備と、習俗の不条理と、精神の無能と、われわれの習慣の矛盾の中にあるのではないか<sup>11</sup>」と考察している。現代でも多くの社会問題がそうであるように、結婚における「不調」の悪化したものとして、「不貞」が起こるとするならば、不貞に進展する場合、しない場合があるにせよ結婚を描いた文学作品の中には数多くの「不調」が描かれている。それは妻や夫一方の責任である場合もあれば、夫婦間の理解不足も見られる。このように、文学作品の中でもモデルとして描かれる「不調」の原因の一つは、結婚制度の不備などの政治的要因であるとバルザックは指摘する。

制度の人目につかぬ悪弊を弾劾した後で、わが国の習俗がそれを墮落させたやりと理由を研究することは、これまた一つの哲学的検討ではないだろうか？今日、フランスにおいて女と結婚を支配している法律と習俗の体系は、1789年の大革命によって発展した理性と正義の永遠的原則とは、もはや何の関係を持たぬ古き信仰と因習の落とし子である。<sup>12</sup>

また、「19世紀ほど不倫について多くの文章が書かれたことはない。<sup>13</sup>」と指摘する、サビーヌ＝メルシオール・ボネは「誰もが不倫について、観察や経験に基づいた一家言を

---

<sup>10</sup> バルザック『結婚の生理学』、57頁。

<sup>11</sup> 同上、72頁。

<sup>12</sup> 同上、93頁。

<sup>13</sup> サビーヌ＝メルシオール＝ボネほか、『不倫の歴史』、橋口久子訳、原書房、2001年、172頁。

吐いた。唯一、変化がほぼ皆無だったのは法律の分野であった。<sup>14</sup>」と述べている。ナポレオン法典で定められた離婚許可理由に「姦通」が入ったが、これは夫を裏切った妻とその愛人を想定しており、夫の不貞は内縁の妻を夫婦の家に住ませた場合のみ有罪であったので、夫婦間の不平等さを目立たせる内容であった。ちなみに、18世紀末の1792年の法によって協議離婚が認められたが、離婚者が大量に発生したために1816年には一度離婚制度を全廃した。のち1884年にふたたび離婚法は可決された。このように、多くの不満が残るとはいえ人びとの意識に遅れるかたちで法律も変化していったのである。『結婚の生理学』は離婚制度廃止時代の作品である。

この作品と時代を同じくして、社会思想家のフーリエ(François Marie Charles Fourier, 1772-1837)は、コキュ « cocu »(妻に不貞を働かれた夫)を64のタイプに分け、その中からもっともよく見られるコキュのタイプを発表した。

- 1 位 自分が疎んじられていることを知らず、妻を独占していると思っている嫉妬深い御仁
- 2 位 夫婦愛に飽きてよそで戯れたいと思っているため、妻の行動に目をつむり、子供さえできなければいいと妻が弄ばれるのをすっぱり見捨てる夫
- 3 位 妻の浮気を知っていて、妻に無礼な態度を取ることで運命に抗おうとしている嫉妬深い愚か者

そして、この最後の等級だけが、運命に逆らおうとしている点で嘲笑の対象となる。<sup>15</sup>

このように、不貞という「運命」ないし「病気」にまきこまれた場合、逆らい足掻くことは正しい対応ではないと考えられている。『結婚の生理学』では、どのように考察しているのだろうか。いくつか引用しながら読み比べてみたい。

『結婚の生理学』では、さまざまな攻防を試みたにも関わらず妻に不貞を働かれてしまった場合、諦めるか復讐という手段を提示している。ここで「補償」というキーワードが示されており、妻が不貞によってもたらされたベッドの技術の向上や不貞という気分転換ないし夫へのうしろめたさからか愛想がよくなった結果、家庭生活がよいものとなること、愛人の影響で教養深い女性へと変貌をとげることなどが挙げられている。夫によっては気にい

---

<sup>14</sup> サビーヌ・メルシオール＝ボネほか、前掲書、172頁～174頁。

<sup>15</sup> 同上、183頁。

らないことかもしれないが、バルザックはこの「補償」としての妻の変化を好意的にとらえている。さらに、「あなた方(夫婦)の結合を完全なものにするためには、たぶん『独身者(愛人)』の力強い介入が必要だったのだ。<sup>16)</sup>と、「雨降って地固まる」とでも言うように述べている。作品中ではくり返し不貞の防止を強調していたにもかかわらず、一度失敗の気配を読みとるや早々に態度をひるがえしている。

この作品の真の目的とは、完璧に妻の不貞を防ぐための攻防策ではなく、攻防のために夫がすべき数々の研究と観察のプロセスではないだろうか。次に、作品中の具体的な研究方法を見てゆきたい。

## 1.2 結婚の問題と具体的研究

オペラ『フィガロの結婚』が表わすように、結婚という悲喜劇の役者は夫婦では足りない。夫と妻、子供たち、夫婦の友人たち、それぞれの親たち、ある時は愛人、医者、召使いなど名脇役が欠かせない。

バルザックの結婚に関わる研究は、知り合いの結婚の状況を参考にするだけでなく、統計や医学的見地からの分析で行われている。まず、結婚を構成する男女(ここではフランス人に限る)について、結婚するにふさわしいような淑女の数を見積もった。当時のフランスの人口は3000万人で、うち女性は単純計算で約1500万人である。その1500万人から、年齢、容貌、階級などいくつかのフィルターにかけられ残ったのが100万人で、そこからさらに上品な淑女は40万人であるとした。男性のほうも、「淑女に讃仰を捧げるに足る<sup>17)</sup>」100万人の独身男性が残り、一人当たり3つの情事に関わる計算で300万、300万の恋愛に対応するのに40万人の淑女しかいないことになる。このように研究の対象になるサンプル数を見積もると、いよいよ研究の始まりである。女性の考えること、教育、影響をうけた書物にはじまり、妻が不貞を働く理由や妻の観察方法である。

バルザックが多くのページを割いている「妻が不貞を働く理由」についての考察は、妻の母親、寄宿学校での教育と女友達などを原因に挙げている。妻の母親である義母にもしわづかでも不貞の疑惑がある場合「どんな場合にせよ、彼女(義母)は娘(妻)にとって不吉な手本であるか危険きわまる助言者となろう<sup>18)</sup>」とあり、他にも寄宿学校での閉ざさ

<sup>16)</sup> バルザック『結婚の生理学』、254頁。

<sup>17)</sup> 同上、42頁。

<sup>18)</sup> 同上、66頁。

れた世界がつくりあげた人格に対して「少女は寄宿舎からたぶん処女のままで出てくるだろうが、純潔だとはいえない。彼女は恋人たちについての重要な問題を一度ならず討論しただろう<sup>19</sup>」と述べている。学校で知り合った女友達に身持ちの悪い少女がいなかったとは限らないし、また、フローベール (Gustave Flaubert, 1821-1880)の『ボヴァリー夫人』の中で明らかにされるが、読書によって培われた恋愛への幻想は実際の結婚生活において絶望を生み出すものである。バルザックが注意を促していることは「結婚を決して暴行から始めてはならぬ<sup>20</sup>」ということだ。この暴行とは、肉体的な事項だけでなく、妻が抱いているだろう幻想を唐突にぶち壊すことも意味している。ここから、バルザックが挙げた命題である結婚という果てしない闘争が始まるのである。その闘争に必要な観察術について考えてみたい。

バルザックは『二重の家庭』(*Une double famille*, 1830-1842)にラヴァテール (Gaspard Lavater, 1741-1801)の観相学を登場させ、人物の顔つきからその性質を見抜く試みをしている。同様に『結婚の生理学』でもラヴァテールの観相学やガル (Franz Gall, 1758-1828)の理論を用いることで妻の不貞の兆候の読みとりを提唱している。

ラヴァテールの観相学は真の学問を創造した。それはついに人間の諸知識のうちに位置を占めたのである。初め、いくつかの揶揄がこの本の出現をむかえたにしても、つぎにはかの有名なガル博士が、頭蓋骨に関する彼の美しい理論をもって、このスイス人の理論体系を補足し、鋭敏にして赫々たる観察を充実させたのである。<sup>21</sup>

この方法は疑似科学的でこそあるが、この時代に相当に生理学的な色彩を付与することができただろう。日本においても江戸時代、水野南北(1760-1834)という観相学者がいたので、広くあらゆる人間に対応可能な方法であると言える。この方法は疑似科学的ではあるが、この時代にかなり生理学的な雰囲気を与えることができただろう。先に引用したように、医学や科学的なタイトルの本が流行したとはいえ、夫婦の関係を研究するなかで観相学を用いるのは新鮮である。また、ラヴァテールらの理論は人相からその人物の性質を知る方法だが、バルザックはその方法からさらに「病氣」なる不貞の要素、兆候

---

<sup>19</sup> バルザック『結婚の生理学』、65頁。

<sup>20</sup> 同上、55頁。

<sup>21</sup> 同上、129頁。

を探しだそうとした。まるで良い医者が患者を丹念に診察するように、妻のわずかな行動の違いにも目を光らせている。この研究はひどく時間がかかるし手間も神経も使うが、妻を研究するために時間を用いることを怠る夫は、不幸を「予定された人<sup>22</sup>」であるのだ。この解剖的な描写や社会観察の方法はのちに『人間喜劇』などの作品において発揮される、ゾラがバルザックの想像力を「誇張に没入し、異常な構想に基づいて世界を作りなおそうとするあの無軌道な想像力<sup>23</sup>」と批評する反面で、「彼は現実感覚をもたらす用いた最初の小説家の一人であり、それによって一つの世界全体を描き出すことができた<sup>24</sup>」と評している。

### 1.3 『結婚の生理学』が現代に語りかけるもの

序論で述べた、現代にまで続く結婚の不成功の頻発について、ここで少しのヒントが見出せるのではないだろうか。まず、1.2 で明らかにされた夫婦間での長く丹念な結婚研究こそ結婚の失敗を最小限におさえることのできる方法であろう。『結婚の生理学』は若い男性の立場での考察であり、男性側にこのような研究を勧めているが、ゾラのいうように、相互の折り合いと思いやりこそ欠かせないものである。そもそも『結婚の生理学』には「夫婦の幸福と不幸に関する折衷哲学的考察<sup>25</sup>」という副題がつけられており、はじめは他人同士であった二人の男女の共通の幸福には妥協という名の歩み寄りが必要だとわかる。現代の離婚した夫婦の半数がその理由に「性格の不一致<sup>26</sup>」を挙げている。ゾラはまた、1881年のフィガロ紙に「私の考えでは、すでに結婚している場合、最良の方策は自分の家庭で折り合いをつけ、できるかぎり幸福な結婚生活を送ることである。<sup>27</sup>」と述べている。注目したいのは、結婚に不平を言う人びとへのバルザックのすすめである。

この制度に対してあれほど多くの不平不満があるのは、それはおそらく、男がこの制度の悪いところしか記憶せず、結婚は人生における一つの人生だというわけで、人生を非難するように妻を非難するからなのであろう。新聞を読むことによって自分の意見

<sup>22</sup> バルザック『結婚の生理学』、49頁。

<sup>23</sup> ゾラ『ゾラ・セレクション 8 文学論集』、佐藤正年編訳、藤原書店、2007年、15頁。

<sup>24</sup> 同上、15頁。

<sup>25</sup> バルザック、同上、7頁。

<sup>26</sup> 厚生労働省調べ、1998年。

<sup>27</sup> ゾラ『ゾラ・セレクション 10 時代を読む』、小倉孝誠ほか編訳、藤原書店、2002年、201頁。

を作りだす習慣のある御仁なら、あまりに折衷主義癖をふりまわす本について、たぶん悪口をいうだろう。<sup>28</sup>

すべてのコインに表と裏があるように、結婚という制度を全面的に非難することはできないだろう。気にいらぬものを非難するのは自由だが、バルザックの言うように、結婚の悪いところ、妻の悪いところだけを見つめて非難するのは間違いであるということだ。そして、折衷主義についても、白黒はっきりつけたがる人びとに対して柔軟な考えを持つこと総合的な見方をすることをすすめているのではないだろうか。現代人の中には自らに無理を強い、我慢を続けてまで結婚生活を続ける必要性がないと考える人が増え、結婚の結びつきがゆるやかになった風潮の中であっても、この歩みよりは現代のわれわれにとっても大変有用な助言である。自分は我慢していると考えている本人でも、相手には我慢をさせているかもしれない、夫婦という結びつきを選んだ人間同士ならば、二人の関係を「総合的」に見つめ、「折衷的」に暮らしていく手段を選びとることはできないかと、バルザックはわれわれに示しているのではないだろうか。

19 世紀という時代はアンシャン・レージュム、フランス革命を経て、フランス社会が変化した時代であった。19 世紀以前の婚姻制度については以下のものであった。

婚姻法は、ある社会の姿を映し出す鏡のようなものとして社会の内部に形成されるものであるから、(…)婚姻は、どんな社会階層においても、まず何よりも利害に、しかも多種多様の利害にかかわる事柄であるとみなされ、感情的側面はつねに利害の次にしか考慮の対象にされなかった。<sup>29</sup>

それでは、それにつづく 19 世紀はどのようなものであったのだろうか。本章では、「男性側」の目線で結婚を見てきた。次の第 2 章で取り上げる文学作品はいずれも、男性の作家が「女性側」の目線を描いたものである。先ほど引用した、「われわれはその諸原因が、法の不備と、習俗の不条理と、精神の無能と、われわれの習慣の矛盾の中にあるのではない

---

<sup>28</sup> バルザック『結婚の生理学』、269 頁。

<sup>29</sup> フランソワ・ルブラン『アンシャン・レージュム期の結婚生活』、藤田苑子訳、慶應義塾大学出版会、2001 年、25 頁。

か。」というバルザックの見解をもとに、第 2 章では、『結婚の生理学』で学んだ結婚の問題を踏まえ、文学作品に描かれる夫婦たちの分析を行ってゆく。先述のとおり、多くの夫婦が抱える「不調」にはどのようなものがあるのだろうか、この章では、19 世紀の作品とその登場人物たちを、少女時代と教育、夫婦という単位の役割、子供たちの 3 つのテーマに沿いながら考察してゆく。

## 第2章 文学作品における結婚

前章では、バルザック『結婚の生理学』をもとに、結婚に関する問題について考察した。本章では、19世紀の文学を題材にいくつかの結婚を取り上げてゆきたい。

### 2.1 少女時代と教育

バルザックは、結婚を議論する上で、花嫁側の少女時代の過ごし方や教育について述べており、彼の作品中でも寄宿学校での生活を描いている。ここでは、バルザック『二人の若妻の手記』、フローベール『ボヴァリー夫人』、モーパッサン『女の一生』の三作品に取材したい。三作品に登場する「花嫁たち」は4人おり、夫を欺く妻、欺かれる妻などいずれも共通点をもちながらそれぞれ違う結婚生活を送っている。各作品も娘たちが修道院付き寄宿舎から出てくる時期を彼女たちの登場場面としている。彼女たちは少女時代どのような教育を受け、どのような考えを持って過ごしてきたのだろうか、またその初期教育は彼女たちにどのような影響をもたらし、あるいは危険になりうるのだろうか。『結婚の生理学』はいみじくも、修道院をこのように表現している。

修道院の鉄格子は想像力をかきたてるのだ(…)ある娘たちは、さんざん幻想を愛撫したあげく、多かれ少なかれ奇妙な取り違えをする。ある娘たちは、夫婦生活の幸福を誇張して考えた結果、夫のものになった時、「なんてこと!これだけのことかしら!…」と心に思う。いずれにしても、いっしょに育てられた娘たちが身につけるような不完全な知恵は、無知からくるいっさいの危険と知識がうみだすいっさいの不幸の両方を備えているのだ。<sup>30</sup>

年頃の少女だけを集めて教育している修道院では、彼女たちと同じ年頃の男性と知り合う機会はなく、過剰な美化や妄想の末、このような「失望」が生まれるのである。次に、バルザックのこの意見を補強するであろう「花嫁たち」の証言を引用したい。まず、『ボヴァリー夫人』エマの例である。

---

<sup>30</sup> バルザック『結婚の生理学』、66頁。

結婚するまでエマは恋をしているように思っていた。しかしその恋からくるはずの幸福がないので、あたしはまちがったんだ、と考えた。至福とか、情熱とか陶酔など、本で読んであんなに美しく思われた言葉は世間では正確にはどんな意味でいっているのか、エマはそれをしろうとつとめた。<sup>31</sup>

ここでは、結婚直後、想像していたほど結婚生活はロマンティックではないこと、自分の目の前にいる夫は小説の中で読んだ紳士とは違うことに気づく。次に、『女の一生』、ジャンヌの例を見てみたい。

修道院で過ごした少女時代、将来のことばかりを考え、夢ばかり見ていた。あのころは、希望に胸を高鳴らせることの繰り返しが生生活のすべてであり、時間は気づかぬうちに過ぎていった。<sup>32</sup>

ジャンヌはかつてのような夢にふけていた。そっと針仕事の手をとめ、だらしと手を下ろし、ぼんやりと遠くを眺めながら少女のころに読んだ小説の世界を思い出す。(…)だが、とつぜんシモン爺さんに何かを言いつけるジュリアン(夫)の声が聞こえてきて、彼女を夢から引き離す。(…)「もう、すべて終わってしまったのね」針を持つ指に涙がこぼれ落ちる。<sup>33</sup>

ここでは、結婚前は理想的な男性だと思っていた夫が結婚後に豹変し、吝嗇で狭量な性格であることが発覚した後の失望の一端が描かれている。このように、花嫁たちの少女時代は、結婚生活ひいては人生そのものに大きく影響を与える。当時のフランスでのブルジョワ以上の女子教育は寄宿学校か家庭において家庭教師をつけるかであった。その後18歳前後になったところで結婚するのが一般的である。中には、『女の一生』でジャンヌの叔母リゾンがそうであるように、修道院に入ったまま過ごす場合もあった。作家ゾラは当時のフランスの教育についてこのように述べている。

私見によれば、フランスの寄宿学校、それも最もよく経営されている寄宿学校で少

<sup>31</sup> フローベール『ボヴァリー夫人』、生島遼一訳、新潮社(新潮文庫)、1974年、43頁。

<sup>32</sup> モーパッサン『女の一生』、永田千奈訳、光文社(光文社文庫)、2011年、137頁。

<sup>33</sup> 同上、170頁。

女たちが受けている教育はまったく凡庸で、不完全なものだ。他の国のどんな少女たちもこれほど嘆かわしいカリキュラムを課されていない、と思う。まず、人生の実際的な分野にかんして彼女たちはまったく無知である。(…)より重大なのは、寄宿学校の精神そのもの、彼女がそこで吸い、ときには永久に彼女を損なってしまう特殊な空気のほうだ。彼女は社交界のために育てられ、洗練にともなうさまざまな偏見を吹きこまれ、流行の衣裳を身につけるマネキン人形に変えられる。<sup>34</sup>

このように、結婚生活に起こる不具合の一つは、女子教育の誤った方向性によるものであると考えられる。現代の女子高生たちはどのように子供ができるのかについて、学校で教わるのはもちろん、多くの情報にさらされることでよくわかっている。しかし当時の上流階級の子女はそうではない、男女の肉体関係について知らないわけではないだろうが、ぼんやりとした知識である。フランスは男子と女子の教育を別のものとし、旧体制期には「結婚証明書における妻の自著件数は夫の半数にすぎない<sup>35</sup>」ことから、読み書きのできない女子が多かったことがわかる。しかし「良家の子女は、女子修道院付属の学寮や、ウルスラ会のような女子修道会で、初等あるいは中等水準の教育を受けていた。<sup>36</sup>」ということから、一定の教育を受けていたようだ。また、革命後においても「女子教育に関しては、タレイランは、実用的な知識の習得と普通教育を結びつけようとする配慮はほとんど払わなかった。<sup>37</sup>」とあり、男女が等しく知識をつけられる環境であったとはとてもいえない。

バルザックが『結婚の生理学』で述べた、「夫婦の運命は、初夜にかかっている<sup>38</sup>」、そして「結婚を決して暴行から始めてはならぬ<sup>39</sup>」というこの二つの教理は、実際的な夫婦生活の知識に乏しい少女たちに気遣うことなく身勝手な方法で初夜を迎えることは、夫による強姦も同じで、強姦で始まった結婚生活はうまくいかないということである。この場合、十分な知識がない状況で初夜を迎えてしまった少女に落ち度はないだろう、教育の不備そして、夫の配慮が問題である。『女の一生』のジャンヌはまさに強姦のような初夜

<sup>34</sup> ゴラ『ゾラ・セレクション 10 時代を読む』、32 頁~33 頁。

<sup>35</sup> アントワーヌ・レオン『フランス教育史』、池端次郎訳、白水社、1975 年、50 頁。

<sup>36</sup> 同上、50 頁。

<sup>37</sup> 同上、58 頁。

<sup>38</sup> バルザック『結婚の生理学』、57 頁。

<sup>39</sup> 同上、55 頁。

を迎えた花嫁であるが、翌朝の「うっとり夢見ていたのとはまったく違い、淡い期待を裏切られ、おめでたい気持ちもしぼむほどの幻滅を味わい、ジャンヌは心の底から絶望していた<sup>40</sup>」という描写からわかるように、絶望から始まる結婚生活になってしまった。その後、あらゆる夫への期待や夢は消え去り、やっと現実的な妻になろうとするのである。

このような結婚前の思い違いは多かれ少なかれどの少女にもみることができる。『二人の若妻の手記』のルネは比較的現実的な考え方をもち、他の少女との対比が明らかであるので、彼女が寄宿学校時代の親友ルイーズに宛てた手紙に例をみてみたい。

この片田舎の娘(ルネをさす)は、あたしたちが一緒に暮らして来た高い空の頂きから、凡俗の世界に落ち、ひなぎくの一生にも似たつつましい一生を送るのです。(…)これからさきの単調なその日その日にも、田舎の小さな楽しみで味わいがつけられるでしょう。

41

ルネは、親友と過ごした少女時代やパリで華やかな生活を送る親友をうらましいと感じる一方で、田舎で自分の身丈にふさわしい生活を送ること、甘い恋愛に憧れず自分の夫と幸せな家庭を築くことを望んでいる。『二人の若妻の手記』では題通り、二人の若妻の手紙のやりとりから二つの対照的な人生を見ることができるが、注目したいのは、結婚前の友人の存在の役割である。『二人の若妻の手記』では、情熱的に恋に生きるルイーズと現実的な結婚をしたルネの対比の中で、「自分が得られなかった人生」を生きる友人へさまざまな感情を持っている。恋を諦めたルネはルイーズの自由な生き方に忠告や非難をむけている、ルイーズのほうは子供がいなことを気に病み、ルネの子供に会いたくないと思うこともあった。二人は励まし合い、嬉しいことは喜び合う間柄でありながら、どうしても自分の幸せと天秤にかけずにはいられない。『ボヴァリー夫人』においては、エマはより明確にこの「友人たちとの比較」を意識している。エマは田舎暮らしの中でパリを夢見、夢見た理想の夫とはかけ離れた男性を夫にし、このようなつづやきをもらしている。

Tous, en effet, ne ressemblaient pas à celui-là. Il aurait pu être beau, spirituel,

<sup>40</sup> モーパッサン、前掲書、105頁~106頁。

<sup>41</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、34頁。

distingué, attirant, tels qu'ils étaient sans doute, ceux qu'avaient épousés ses anciennes camarades du couvent. Que faisaient-elles maintenant ? À la ville, avec le bruit des rues, le bourdonnement des théâtres et les clartés du bal, elles avaient des existences où le cœur se dilate, où les sens s'épanouissent. Mais elle, sa vie était froide comme un grenier dont la lucarne est au nord, et l'ennui, araignée silencieuse, filait sa toile dans l'ombre à tous les coins de son cœur.<sup>42</sup>

みんながみんな、こんな夫とはかぎらない。美男で、才気があって、上品で、魅力があったかもしれない。修道院時代の友だちが結婚したのはきっとそういう人なのだろう。あの人たちがいまどうしているかしら？都会に住んで、街路の音や劇場のざわめき、舞踏会のかげやかな光、心がふくらみ感覚がみちたりの生活をしているのだ。それに自分、この自分の生活は北の窓しかない納屋のように冷たく、退屈という黙々とした蜘蛛が四隅に巣をはっている。<sup>43</sup>

ルイズとルネは少女時代に「別の人生」をうつす友人に出会い、ルイズは、典型的な貴族女性である母を見て振舞いを学び取った。エマは自分が選ぶことのできなかったような生活を学生時代の友達に送っているに違いないと妄想し、自分と比較しては悲しみにくれている。どの娘も少女時代には夢を抱きながら過ごし、それぞれに現実の結婚生活に入ってゆく。無垢な状態で生まれてきた少女が「社会化」の洗礼を受けるのがこの時期であると言えるだろう。もしも、エマが学校へ通わず、自分が生きている環境の外に魅力的な世界があると知らなかったら、彼女は自分の結婚生活に満足しただろうか。他者または自分が思い描いていた理想と現実を比較するのはやむを得ないことで、それによる絶望や嫉妬、あるいは優越と付き合いながら生きてゆくしかないのである。

人間は生まれてからそれぞれの置かれた環境に合わせて成長する。結婚を描いた文学作品に少女時代を描くのは、少女時代は結婚という大きなストーリーの序章のような役割を果たすからではないだろうか。現代の私たちが社会で自らを説明するのに履歴書を用いるように、役者である娘たちがどのような育ち方をし、考え方を持っているのかを説明する上で人生の初期教育の詳細を提示するのはとても有効な形であろう。

---

<sup>42</sup> Flaubert, *Madame Bovary*, in *Œuvres*, t. I, Paris, Gallimard, 2001, pp.331-pp.332.

<sup>43</sup> フローベール、前掲書、55頁。

## 2.2 結婚と社会生活—夫婦という単位

次に、結婚した男女がどのようにその結婚生活を営んでゆくのかを見てゆく。結婚した後、夫婦にはどのような生活が待っているのだろうか。まず、『二人の若妻の手記』ルイーズの両親、ショーリュウ侯爵夫妻の例である。

Ma mère occupe au rez-de-chaussée un appartement disposé, comme le mien, dans le même pavillon. (...) Mon père est dans le pavillon opposé ; (...) mon père et ma mère continuent d'habiter le rez-de-chaussée et peuvent y recevoir.<sup>44</sup>

ママは同じ棟の一階に、あたしと同じような部屋わりのアパルトマンに住んでいます。(…)パパはお向かいの棟に暮らしています。(…)パパもママも一階に住んでいて、しかもそこでお客をすることもできるようになっています。<sup>45</sup>

この部分から、ルイーズは母親と同じ棟に住んでいるが、居住空間を共にせずそれぞれ同じ間取りの部屋(appartement)を持っていること、ショーリュウ夫妻はさらに離れて屋敷の中で別々の棟(pavillon)に住み、それぞれの社交生活を送ることができる仕様になっていることがわかる。『女の一生』のジャンヌも「結婚しても各自個室をもつことは、もう話がついていた。<sup>46</sup>」とあるように、夫と共有する生活空間を制限している。現代でもそれぞれの個室を持ち寝室を別にする夫婦はいるが、ショーリュウ夫妻のそれは家庭内別居とも言えるほどである。ルイーズの父である侯爵は「パパは王さまの細かい秘密にまで立ち入っているのです。<sup>47</sup>」ということから、宮廷に出入りするような仕事で、外へ出て働いている。母の侯爵夫人のほうも、「ママのようなご婦人は、女王役をつとめるために、あちこち引き廻されていらっしゃるのです。<sup>48</sup>」ということから、彼女も「女王役」という役目を持っていることがわかる。具体的な侯爵夫人の一日の行動は以下のとおりである。

午前9以降に目覚める

朝の時間 冷水浴、冷たいクリーム・コーヒーを飲む、着替え、長いお化粧

<sup>44</sup> Balzac, *Mémoires de deux jeunes mariées*, in *La Comédie Humaine*, t. I, Paris, Gallimard, 1983, p.203.

<sup>45</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、17頁。

<sup>46</sup> モーパッサン、前掲書、144頁。

<sup>47</sup> バルザック、同上、22頁。

<sup>48</sup> 同上、18頁。

11 時からお昼 朝ごはん

14 時から 「若い男」が訪ねてくる

14 時から 16 時 “誰にも会わない“面会謝絶の時間

16 時から 一時間の散歩

18 時から 19 時 面会時間(外で食事をしないとき)

夜間 お芝居、舞踏会、音楽会、訪問など

このように、一日の大半を社交、またはその準備に使っていることがわかる。そして、夫婦で過ごすのに割かれる時間はごくわずかであるのだ。娘のルイーゼは的確にも、「どちらも貴族で、お金持で、身分の高いこのお二人が、決して一緒に暮らそうとはせず、共通なものとはただ名前だけで、しかも世間にたいしては仲良くしているようにみせかけている<sup>49</sup>」と描写している。また、同じくバルザックの作品『ゴリオ爺さん』(*Le Père Goriot*, 1834) においても、「*le boudoir bleu de madame de Restaud*<sup>50</sup>」*「レストー夫人の青い居間<sup>51</sup>」*や「*le salon rose de madame de Beauséant*<sup>52</sup>」*「ボーセアン夫人の薔薇色の客室<sup>53</sup>」*といったように夫人にしかるべき部屋があり、その中で友人や恋人を受け入れるようにしていることがわかる。「*boudoir*」は「私室」を、「*salon*」は「客間」を意味し、夫人たちがそれらの部屋を所有し、青色や薔薇色などそれぞれに意匠を凝らしている。19 世紀の上流階級の婦人はこのように描写されている。

Maîtresse de maison, femme de ménage, femme d'intérieur, ministre de l'intérieur : tels sont les termes employés pour désigner la femme épouse-mère-maîtresse de maison. Elle ne travaille pas pour gagner sa vie, et pourtant sa vie est occupée, et même surchargée. Femme sans profession ? Oui. Femme oisive ? Sûrement pas.<sup>54</sup>

ショーリュウ夫人はじめ、上流階級の婦人たちは日々の糧を得るための労働の必要は

<sup>49</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、22 頁。

<sup>50</sup> Balzac, *Père Goriot*, in *La Comédie Humaine*, t. II, Paris, Gallimard, 1971, p.905.

<sup>51</sup> バルザック『ゴリオ爺さん』、平岡篤頼訳、新潮社(新潮文庫)、1963 年、122 頁。

<sup>52</sup> Balzac, *Ibid.*, p.905.

<sup>53</sup> バルザック、同上、122 頁。

<sup>54</sup> Jean-Paul Aron, *Misérable et glorieuse la femme du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Edition Complexe, 1984, pp.117-118.

ないが、絶えず「〇〇夫人」として振る舞うことを要求され、ハイ・ソサエティの中での人間関係の維持に従事していることがわかる。特別生産的なことはせず、家事も侍女や従僕にまかせられるにしても、「〇〇家」を切り盛りする内務大臣の役目を果たしながら、舞踏会やオペラの観劇中には外交官のように他の家の貴族と交際するのが彼女たちにとって欠かせない仕事である。

また、田舎に住む貴族の場合、地域貴族社会内での交際に加え、所有する広大な農地の管理という仕事加わる。夫が切り盛りすることも、妻が行うこともあり、『二人の若妻の手記』のルネは南仏の田舎で、一家の所有する農地の切り盛りを積極的に行っているが、『女の一生』の夫妻は夫ジュリアンが行っている。『谷間のゆり』(*Le Lys dans la vallée*, 1835)モルソー夫人の例をみてみたい。

小屋が出来上ると、ちゃんと二人、とてもいい小作人が見つかって、一人は税金を向こうもちで四千五百フラン、もう一人は五千フランで話が決まりましたの。(…)年に一万九千フランの収入がありますし、今まで植えておいた木からも年々立派に利益が戻って来るようになりましたわ。<sup>55</sup>

モルソー夫人は憂鬱で起伏の激しい性格の夫に代わって土地の活用や小作人の管理を行い、ゆくゆくは息子に継がせることを想定しながら、土地から出る収益を貯金し子供たちの将来に備えている。続いて、『二人の若妻の手記』ルネの例である。

あたしの家とお母さまの後楯で、遠からずルイ(ルネの夫)は県会の評議員に選ばれるだろうと思っています。あたしは野心家ですから、お父さまが引きつづき財産を管理して貯金をふやしてくださるのは大へん結構、そのお金はぜんぶ政治運動に使うつもりです、(…)もし子供が生まれたら、みんな幸福に育て上げ、政治のりっぱな地位に就かせたいと思います。<sup>56</sup>

ルネの場合は、素直で優しい夫を教育して政治家にしようとしている。現代でも農業大

---

<sup>55</sup> バルザック『谷間のゆり』、宮崎嶺雄訳、岩波書店(岩波文庫)、1994年、232~233頁。

<sup>56</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、69頁。

国のフランスは地方議会が都市にひけを取らない力を持っているのでルネの計画はかなりの現実性を帯びている。

ショーリュウ夫妻はじめ、モルソー夫妻らに共通する点は、いずれも夫婦という「単位」で生活しているということだ。彼女たちは社会では一般的に「〇〇夫人」と呼ばれる。ルネたちレストラード夫妻は目的と使命を共にし、より強い意志を抱く妻によって結成された戦友であるし、ショーリュウ夫妻はお互いにどのような社交生活を行っているかについてすべてを知り合っているわけではないが、社交の場では「仲よくしているふり」を欠かさない。文学作品において多くの結婚や結婚生活が描かれるのは、それが恋愛によるものであれ、家の結びつきであれ、または金銭上の事情からなるものであれ、結婚がまず社会の舞台へ登場する必要不可欠な手続きであり、結婚していないと一人前扱いされないからではないだろうか。そしてこの結婚の結びつきは身分が上がるほど強いものになっていく。下流階級に属する夫婦たちは、所有する土地からの上がりもなければ賃金も安くなるため、共働きという場合も少なくない。商店を営んでいるなら、妻は店の「女主人」として番台に座っているし、農村であれば、妻も農作業に従事する。ゾラ『居酒屋』(*L'Assommoir*, 1877)のジェルヴェーズは未婚で母となっている。子供の父親が怠け者で、彼女が一家の働き手であったが、捨てられてしまう。その後別の男性と結婚するが、「心配しなくてもいいのよ、あたしが思いきり働くから<sup>57</sup>」と共働きを宣言している。これは日々の生活のための労働であるが、夫婦力を合わせてという体裁で生活している点では夫婦の「単位」は保たれている。

さいごに、19世紀という時代の特徴であるお金にまつわる夫婦の「現象」を見てゆく。フランス革命後1804年にナポレオン法典が制定された。これは、「19世紀初頭では、フランスは革命の自由主義の『後遺症』として、既婚・未婚を問わず、男女の風紀はいちじろしく乱れていた<sup>58</sup>」背景として、内縁関係のカップルが増加したこと、私生児の増加などにより「家庭が大きく揺らいでいた<sup>59</sup>」状況を打開せんとするナポレオンの意図によるものである。この法律により、女性の権利、主に財産分与やお金の使い方に制限がかけられた『ゴリオ爺さん』のニュシンゲン夫人の例に、自由にお金を使えない妻の様子見てみたい。

---

<sup>57</sup> ゾラ『居酒屋』、古賀照一訳、新潮社(新潮文庫)、2007年、120頁。

<sup>58</sup> 浜本隆志ほか『ヨーロッパ・ジェンダー文化論』、明石書店、2011年、240頁。

<sup>59</sup> 同上、240頁。

じつは、主人のニュシンゲンは一文だって自由には使わせてくれないのよ。(…)七十万フランの持参金を持ってきたわたしが、どうして身ぐるみ剥がされるままになったかという、誇りのため、怒りのためなんですよ。夫は(…)わたしの持参金を取っているの、とにかく(借金を)払ってはくれましたわ。でもそれからは、わたしのお小遣いのある額にきめ、わたしも喧嘩したくないので、それで我慢しました。<sup>60</sup>

これがパリに住む女たちの半数の生活ですよ。外見は贅沢で、心のなかにはむごい悩み事というのが。わたしは、このわたしよりまだずっと不幸な、かわいそうなひとたちを知っています。(…)夫のお金をくすねざるをえない女もいます。<sup>61</sup>

ナポレオン法典によると夫婦は夫婦共有財産制にもかかわらず、「夫は妻に対し保護義務を負い、妻は夫に対し服従義務を負う<sup>62</sup>」こと、「妻の行為無能力 妻の財産上の行為は、遺言を除いて、夫の協力または書面による同意を必要とする。<sup>63</sup>」とされている。法律上で妻の服従が規定され、財産を自由にできないようにされている。このように、法律によって制限されるほかに、ニュシンゲン夫人のように夫からの圧力で自由を制限されている妻が見られる。『居酒屋』のジェルヴェーズは稼ぐそばから内縁関係のランチエに巻き上げられ、『女の一生』のジャンヌは母親から新婚旅行のお小遣いごと渡されていたお金を横取りされたあげく、抗議もできないまま「金が僕のところにあるが、おまえのところにあるが、どうでもいいだろう。僕らは夫婦なんだ。<sup>64</sup>」の一言で言いくるめられてしまう。ジャンヌの場合では、夫婦共有財産を逆手にとられた例であろう。

現代では多くのカップルが恋愛による結婚をできる時代になった。『二人の若妻の手記』のルイズはマキュメール男爵を熱愛しているし、『居酒屋』のジェルヴェーズはブリキ職人クーポーから求愛されて結婚しているが、19世紀では現代と比べてその数は少ない。恋愛感情から結び付けられる夫婦ではない場合、結婚は必然的にロマンティックなものではなく現実的なものになる。下層階級は生活のため、子供をつくって家庭をつくるため、中・上流階級は家系を保ち、家をより繁栄させるために結び付けられた男女一

<sup>60</sup> バルザック『ゴリオ爺さん』、253頁～254頁。

<sup>61</sup> 同上、256頁。

<sup>62</sup> 江川英文編『フランス民法の150年(上)』、有斐閣、1957年、182頁。

<sup>63</sup> 稲本洋之助『フランスの家族法』、東京大学出版会、1985年、19頁。

<sup>64</sup> モーバッサン、前掲書、135頁。

組を「夫婦」と呼び、その手続きを「結婚」と呼ぶのではないだろうか。

### 2.3 子供の役割

夫婦となった男女の結婚生活の中で重要な役割を果たすのが、子供の存在である。「〇〇家」の跡取りとして大切に育てられる子供、金のかかるものとして放っておかれる子供などさまざまな境遇にいる子供たちは、文学作品でどのように描かれているのだろうか。まず、男の子を産んだばかりの『女の一生』のジャンヌの例である。

もう大丈夫だ、どんなに絶望感に襲われても、この子がいれば大丈夫だとジャンヌは思った。ほかのことは何もできなくなるほど、ひたすらに愛情を注ぐべきものを手にしたのだから。<sup>65</sup>

ジャンヌは夫への愛情が薄れ、息子を溺愛することに生きがいを見出そうとしている。愛情を注ぐことで、夫の裏切りや性格の不一致などの不満を忘れ、母親として生きることと自分の確かな地位を自覚することができる。ゆくゆくは頼りになるであろう息子に期待し、幸せとはいえない結婚生活の「代償」を見出そうとしている。続いて、『二人の若妻の手記』のルネの例である。

あたしは産後感謝式のミサを聞きに教区へまいりました。(…)ああこれほど感謝の念に燃えて神のみ前にひざまずいたことは一度もありません。(…)娘時代、人生や自分の未来に疑いを抱いたその場所に、喜びあふれる母親となりかわってふたたびひざまずいたとき、聖母マリアさまが祭壇から首をかしげ、聖なる幼児を指し示してられるのを見る思いがいたしました。<sup>66</sup>

ルネは子供(男児)を出産したことで、娘時代は親しみを抱きにくかった教会に晴れ晴れとした気持ちで行くことができるようになっている。子供を得た喜びと感謝、子供の健康を願う気持ちがあふれ出るようにルネの心に生まれ、それを教会へと向けている様子がわかる。また、自ら母になったことで、同じ「母親」である聖母マリアへの思いを強くしてい

<sup>65</sup> モーパッサン、前掲書、223 頁。

<sup>66</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、1979 年、133~134 頁。

る。ルネは母になったことで、夫ルイへの感情も変化している。「いまあたしはルイに対してある感情を胸に抱いていますが、それは恋愛とはいえないまでも、愛している女のもとあっては、恋愛のおぎないともなるべき感情です。<sup>67</sup>」とあるように、恋愛結婚でないレストラード夫妻が子供の誕生によって、恋愛感情とはまたべつの深い絆によって結びつけられている。もともとレストラード夫妻は良好な関係であったので、子供によっていっそう夫婦の「単位」は確かなものとなるのである。また、「レストラード老人(舅)とその息子(夫)とは、旧に倍する優しさであたしをいたわってくれます。<sup>68</sup>」とあるように、一家の跡取りともなる子供をもたらしたことで、家族もルネにさらに優しく接し、ルネは嫁としての地位を確かなものにしていく。当時も子供を乳母に預ける習慣は続き、『女の一生』のジャンヌや『二人の若妻の手記』のルネは乳母や教育係を雇っており、『ボヴァリー夫人』のエマは里子に出している。

近代になると、ブルジョワのなかの先進的な人びとが、子どもに対して強い愛着を抱くとともに、近代的家族観に基づき子どもを家族の中心的存在として重要視するようになる。ブルジョワにおける家族主義の誕生である。(…)そして、家族による学校教育への関与が次第にブルジョワの間で広まっていく。<sup>69</sup>

このように、19世紀という時代は、家族観の変化が見られる時代だった。家族のありかたは家庭によって千差万別で一概に論じるのは困難であるが、『二人の若妻の手記』のルイズが家族によそよそしい態度で迎えられた時、ルネが結婚のために家に戻された時が古い時代であったならば、子供に愛着を持つような家族主義とは、現代に通じる新しい時代であるということができよう。つづいて、民衆の例として『居酒屋』のジェルヴェーズの例をみてみたい。

ジェルヴェーズはせいぜい週に二日休めばいいようにして女の子を育てた。彼女は腕のいい洗濯婦として三フランまでかせいだ。それで、八つになろうとしているエチエンヌをシャルトル街の小さな寄宿学校に入れる決心をし、そこへ百スー支払った。子供

<sup>67</sup> バルザック『二人の若妻の手記』、137頁。

<sup>68</sup> 同上、137頁。

<sup>69</sup> フランス教育学会『フランス教育の伝統と革新』、大学教育出版、2009年、21頁。

ふたりの養育にもかかわらず夫婦は毎月二十フラン、三十フランと貯蓄銀行に預け入れた。<sup>70</sup>

ここでは、貧しい生活ながらも子供のため堅実に努力する夫婦の姿がうかがうことができる。ジェルヴェーズは以前内縁関係だったランチエと暮らしている際は、ランチエが不実をはたらくと子供たちに対して「おまえたちさえ、いなかったらねえ!<sup>71</sup>」と嘆いていたが、クーポーと結婚してからは、貧しいながらも前向きに生きようとしている。しかしながら、長男のクロードに関しては、彼の才能を見出して教育したいと申し出た老人に喜んで預けている点から、子供をお金のかかる「負担」と考えていることがわかる。そして、娘のナナが成長して15歳になるころには「ナナは女工だった。(…)日に四十スー稼ぐようになっていた。<sup>72</sup>」とあることから、若いうちから働いている、もしくは働かされていることがうかがえる。民衆の子育てについて引用をしたい。

民衆家族では、19世紀になっても中世的子ども観が生き続けた。大人たちは子どもに対して無関心で、早くから大人に混じって働かせた。(…)学校教育を受ける子どもは少なかった。<sup>73</sup>

このように、ブルジョワの間では子供と親の親密な関係という観念が生まれるなか、民衆ではまだまだ子供に対して無関心な親が存在することがわかる。19世紀後半には「ブルジョワ家族をモデルとした家族化戦略が出現し、健康、子ども、教育などの規範を民衆に広めることが主張され始める。<sup>74</sup>」とあり、時間をかけながらもフランスではブルジョワ・スタイルの家族観が広まってゆくのである。

本章では、文学作品に取材をして結婚を分析してきた。取り上げてきた作品のすべては虚構でありながら、「現実」という調味料によって完成している。インターネットやテレビのない時代の出来事を記録するのは、文章や絵画によってのみである。上流階級や知

---

<sup>70</sup> ソラ『居酒屋』、187頁。

<sup>71</sup> 同上、22頁。

<sup>72</sup> 同上、580頁。

<sup>73</sup> フランス教育学会、前掲書、23頁。

<sup>74</sup> 同上、24頁。

識人なら自らの生活を手紙などにつづり現代まで伝えられることがあるが、識字率の低い時代の、特に民衆の生活をうかがい知るのは困難であろう。ゾラが『居酒屋』を著すにあたり、ドニ・プロ著『崇高なる者 19 世紀パリ民衆生活誌』という記録資料を利用したという。同じように、19 世紀の文学者たちは現代に 19 世紀を知らせてくれるのではないだろうか。

文学作品はまた、その社会にも影響を及ぼすことができる。フローベール『ボヴァリー夫人』出版にあたり、このようなことが起きた。

56 年(1856 年)10 月から雑誌「パリ評論」(*La Revue de Paris*)に連載され始めると、たちまちスキャンダルを巻き起し、良俗を害し宗教を汚すものとして彼は起訴された。さいわい弁護士の巧妙な弁護で無罪となり、作品は爆発的に読まれ出し、リアリズム文学の傑作の出現とみなされた。<sup>75</sup>

日本でも、過去に渡辺淳一の『失楽園』が話題となり社会で「不倫」が取りざたされたことや、1950 年には「チャタレイ裁判」が起こった。現代の小説やテレビドラマを見れば、特にテレビドラマに顕著に見られるが、不倫を描くのはもはや当たり前のことになっている。作品とは、後世に事柄を伝えるだけでなく、多かれ少なかれその時代にも影響を与えているのである。

---

<sup>75</sup> 饗庭孝男ほか編『新版 フランス文学史』、白水社、2008 年、209 頁。

### 第3章 19世紀—現実の結婚

前章では、文学作品における結婚の姿に注目した。文学作品で得られた「証言」を踏まえながら、本章では、19世紀の現実世界で行われた「結婚」をいくつかを取り上げてゆきたい。

#### 3.1 裏社交界の結婚

裏社交界 (Le Demi-monde)とは、デュマ・フィス (Alexandre Dumas fils, 1824-1895)の戯曲から名づけられた、高級娼婦の世界のことである。彼女たちは社交界に出入りできる身分ではないが、彼女たちを取り巻く男性たちは社交界の人間であり、「半分は社交界人」である。この高級娼婦たちはドゥミ・モンデーヌ(demi-mondaine)とはすなわち、「社交界の貴婦人もどきの高級娼婦」とされた女性たちである。ドゥミ・モンデーヌと呼ばれる条件とは以下のようなものである。

社会的にスキャンダルをおこして、社交界や貞淑な奥方連中から爪弾きされた女たち、また、金次第で言いなりになる高級娼婦、自分の気にいった男には身を委すが金銭づくでは誰のものにもならない女たち(…)この女たちはみな自宅で個別に、また、アパートマンを借りている場合でも、各自都合のよい時間帯を決めてそれぞれ客を取るのである。(…)彼女たちの顧客はもっぱら金持ち連中で、外国の貴族、金融界や産業界の大ブルジョワ、(…)および、容色の盛りを過ぎた娼婦たちのお得意であった地方の金持ちらがそうであった。<sup>76</sup>

ここでは、二人のドゥミ・モンデーヌを取り上げる。一人目は、デュマの『椿姫』(*La Dame aux Camélias*, 1848)の主人公、マルグリット・ゴージェのモデルとなった、高級娼婦、マリー・デュプレシー(Marie Duplessis, 1824-1847)である。ここでは、その伝記『よみがえる椿姫』をもとにしながら、彼女の結婚をみてゆきたい。

マリー・デュプレシー、本名ローズ＝アルフォンシーヌ・プレシーは、高級娼婦として多くの男性の注目を浴び、男性たちは彼女に多くのお金を払った。彼女は、美貌で趣味が

---

<sup>76</sup> アラン・コルバン『娼婦』、杉村和子監訳、藤原書店、1991年、178頁、183頁。

よく、教養を持っていた。そしてマルグリットと同様、ある日喀血し、若くして亡くなるのである。しかし、マルグリットと大きく異なる点は、マリーは結婚をしたことである。彼女は、1846年、元恋人のエドゥアール・ド・ペレゴ伯爵と結婚した。彼女の結婚についてのデュマ・フィスの反応は以下のものである。

この結婚のことを作品の出版後に知ったデュマ・フィスは、女主人公が結婚するように書き換えようと考えたこともあったらしい。しかし、マルグリット・ゴーチエを伯爵夫人にすれば、第二幕はすっかり作り変えなければならない。<sup>77</sup>

このことから、オリジナルの「椿姫」のシナリオとは違っていたようである。「椿姫」に描かれなかった結婚とはどのようなものだったのだろうか。マリーの伝記には、「一人の男を愛するがゆえにもう一人の男と結婚<sup>78</sup>」とある、この結婚の背景は音楽家フランツ・リストとの別れにあった。マリーはリストと交際していたが、彼がワイマールに出発する日が近づき、マリーは彼に付いて行くことを希望した。しかし、リストはマリーの病がいよいよ重くなっていたことと、ワイマールの聖歌隊指揮者に任命されていた彼にとって、パリから付いてきた高級娼婦と一緒にいては、「ごうごうの非難を浴びるに決まっている<sup>79</sup>」状況だったので、リストはマリーと別れることにした。しかし諦めきれないマリーは、リストに付いて行くことを阻む後者の障害について、「最初のうちこそ貴族の女性に見せかけても、すぐに独身であることがばれて、卑しい素性も明らかになる<sup>80</sup>」と思い、「マリー・デュプレシー変じてペレゴ伯爵夫人となる<sup>81</sup>」計画を立て、“都合のよい”恋人であったペレゴ伯爵を狙い実行したのである。二人はイギリスで結婚したが、フランスでもその結婚は合法となった。ナポレオン法典での結婚の要件は満たしていたし、結婚の形式である、「①公示 publication ②挙式 célébration du mariage ③故障の申立て opposition au mariage<sup>82</sup>」に則ればよい。

かくして結婚をした二人だが、マリーはまもなく夫に「真実」を告げ、衝撃を受け愛の冷

<sup>77</sup> ミシュリーヌ・ブーデ『よみがえる椿姫』、中山真彦訳、白水社、1995年、164頁。

<sup>78</sup> 同上、163頁。

<sup>79</sup> 同上、160頁。

<sup>80</sup> 同上、161頁。

<sup>81</sup> 同上、161頁。

<sup>82</sup> 稲本洋之助、前掲書、18頁。

めた夫は結婚をなかったことにするとした。「なかったこと」というのは、当時は「1816年5月8日の法律 カトリク<sup>83</sup>を国教とする王政復古体制と相容れないものとして、離婚をすべて廃止し、法定事由による別居のみ存続させた<sup>84</sup>」ことから、離婚はできていないということである。マリーは伯爵との約束で、ペレゴー姓を名乗らないことにしたが、「貴族の称号だけはがっちり握っている<sup>85</sup>」とあり、「デュ・プレシー伯爵夫人<sup>86</sup>」と名乗ることにしたのだ。

以上が、伝記から読みとるマリーの結婚である。フランス文学者鹿島茂は伝記の作者について、「ミシュリーヌ・ブーデはかなりの想像を交えながら<sup>87</sup>」というコメントをしているので、このラブ・ストーリーのすべてを真実として受け取るのは短絡的であろう。しかしわれわれが目したいのは、彼女の結婚、それも“一方的な”偽装結婚である。意地悪な言い方をすれば、マリーは、法律が離婚を許可しないことを逆にとり結婚をしたと言える。1884年には「有責主義裁判離婚のみを、ナポレオン法典に従って復活」するのである。また、ペレゴー伯爵の両親ともに結婚当時すでにこの世を去っており、結婚に必要である手続きの中で、先述の「③故障の申立て」の際に結婚に反対する両親はいなかったのである。以上の「幸運」から、マリーは伯爵夫人の称号を手に入れることができた。小説『椿姫』よりもこの“椿姫”は策略家であり、「現実には小説より奇なり」の言葉を納得させる結婚である。

続いて、二人目のドウミ・モンデーヌは、オランプ・ペリスイエ(Olympe Pélissier, 1799-1878)、である。彼女は多くの文学者や芸術家と交流を持ち、バルザックとも親交があった。のちにイタリア人作曲家、ジョアキーノ・ロッシーニ(Gioacchino Rossini, 1792-1868)と結婚し、ロッシーニ夫人と呼ばれる。オランプはパリに生まれ、父が早くに亡くなっている。「*« Nous ne savons rien de son enfance ni de son éducation <sup>88</sup> »*とあるので、幼少時代は不明ながら、母マリー＝アデライードはオランプとその姉を女優にしたが、妹のオランプの方が才能に恵まれていたようだ。彼女は15歳になると、若い公爵に4万フランで売られてしまった。さらにその後、公爵が病気になり彼女を手放したため、次はイ

---

<sup>83</sup> 誤字は原文のまま。

<sup>84</sup> 稲本洋之助、前掲書、35頁。

<sup>85</sup> ミシュリーヌ・ブーデ、前掲書、168頁。

<sup>86</sup> 同上、168頁。

<sup>87</sup> 鹿島茂『パリが愛した娼婦』、角川学芸出版、2011年、34頁。

<sup>88</sup> Chantal Maury, « Balzac, Olympe Pélissier et les courtisane de "La Comédie Humaine" », *L'Année Balzacienne* 1975, p.200.

ギリス系アメリカ人の富豪に「転売」された。彼は 2 万 5 千フランの年金を用意してくれたのである。こうして、「une base financière<sup>89</sup>」を確保した彼女は、華やかな世界へとデビューしたのである。オランプのサロンには多くの作家や文化人らが姿を見せ、バルザックもその一人であった。1830 年ごろの彼女の姿を描写した文章を引用したい。

Une demi-mondaine, élégante, intelligente et cultivée, qui sut réunir autour d'elle une société brillante, telle nous apparaît à cette époque de sa vie Olympe Pélissier. Elle eut des liaisons fameuses et d'aucuns soulignent son goût de l'argent.<sup>90</sup>

オランプは優雅で聡明にして教養があったとされ彼女の周りには多くの人が集まった。まるでオランプ・ペリスィエの時代といってもよいほどであった。また彼女はサロンで、以下のような人びとを迎えていた。

(...) recevant dans son salon des grands seigneurs : le duc de Fitz-James, le duc de Duras, des écrivains : Eugène Sue, Balzac, (...) des artistes : Horace Vernet, Rossini.<sup>91</sup>

彼女がこのようなパリ社交界を代表する大貴族や人気作家らと交流を持つことができたのは、彼女にお金があり、広い教養を持っていること、「intelligente」かつ「cultivée」であったからであろう。高級娼婦の条件には以下のようなものがある。

男に恋文が書けないような非識字階級出身の女性は、(…)高級娼婦にはなれないのである。<sup>92</sup>

上流の男に囲われて『金』を得ただけではダメで、その男を介して『文化』を受け取らなければならないのだ。『文化』の有る無しこそが、低級娼婦と高級娼婦を分かつ最大の指標である。<sup>93</sup>

---

<sup>89</sup> Chantal Maury, *op.cit.*, p.201.

<sup>90</sup> *Ibid.*, p.204.

<sup>91</sup> Balzac, *Correspondance*, t. I, Paris, Éditions Garnier Frères, p.770.

<sup>92</sup> 鹿島茂、前掲書、33 頁。

<sup>93</sup> 同上、44 頁。

先ほどのマリーと同様に、オランプを「購入」した男性たちによって教養を得たオランプは、こうして、数々の文化人と交流し芸術家たちのインスピレーションになった。そして、音楽家ロッシーニの妻、後妻ではあるが正式な妻として求められ、迎えられるのである。しかも、「Balzac lui proposa de l'épouser, elle refusa.<sup>94</sup>」とあるので、バルザックにも求婚されたようだ。彼女はのちMadame Rossiniと呼ばれる。オランプとロッシーニの共通点を探すと、オランプには以下のような特徴がみられる。

Olympe avait un sens inné de ses intérêts ; dès son début, elle fit des économies. (...) L'ambitieuse Olympe s'employa par tous les moyens à faire fruitier une fortune peu à peu amassée.<sup>95</sup>

同じように、「Rossini était riche mais économe, voire ladre<sup>96</sup>」とあり、ロッシーニは前妻を金遣いが荒いと評している。ゾラのナナや、マリー・デュプレシーのように浪費家の高級娼婦が目立つなか、お金にしっかりした二人はよい組み合わせであると言える。

オランプの他にも、有名な高級娼婦として、ロシア生まれのテレーズ・ラックマンがポルトガル貴族のパイヴァ公爵に愛され、侯爵夫人となった例もある。性病をはじめとする病にかかり、マリーのように亡くなる娼婦、孤独に貧困の中一生を終える娼婦らもいる中、彼女たちは特別な例であろう。注目したいのは、マリーはイギリスで結婚、オランプやテレーズは外国人を夫にしていることだ。マリーの例でみたように、相手が孤児である場合、フランスに家族のいない外国人の場合、法律に則り結婚に反対する人はいないことになる。また、リストは外国人だが、ワイマールにマリーを連れていくことに「世間体の悪さ」を感じた。現代でも当てはまることだが、「しかるべき家のお嬢さん」とはとても言えない女を妻にしようとするとき、障害となるのは世間体と周囲の声であろう。

### 3.2 「書く女」と結婚

ここでは、二人の「書く女」、文章を書きジャーナリストあるいは作家として、いわゆる「仕事」を持っていた女性と結婚を見てみたい。一人目は「新聞王」といわれた、エミー

<sup>94</sup> Balzac, *Correspondance*, t. I, Paris, Éditions Garnier Frères, p.770.

<sup>95</sup> Chantal Maury, *op.cit.*, p.205.

<sup>96</sup> *Ibid.*, p.207.

ル・ド・ジラルダン(Émile de Girardin, 1806-1881)の妻、デルフィーヌ・ド・ジラルダン(Delphine de Girardin, 1804-1855)である。

デルフィーヌ・ド・ジラルダンは、女流作家で、有名なサロンを持っていた女性ソフィー・ゲー(Sophie Gay, 1776-1852)の三女として生まれた。母親のソフィーは一度離婚しており、デルフィーヌの父のゲー男爵とは二度目の結婚だった。デルフィーヌは美貌で文才に恵まれていたので、母親のサロンには多くのロマン派の作家が集まった。しかし残念なことに、デルフィーヌには持参金がなかったので「いずれの花婿候補も、土壇場になるとデルフィーヌに持参金がないことを理由にして、二の足を踏むのが常<sup>97</sup>」であったようだ。花婿最有力候補といわれたヴィニー(Alfred de Vigny, 1797-1863)も、「一家再興を願って持参金付きの嫁を望む母親を説得できず、打算の結婚を選んだ。<sup>98</sup>」とある。

デルフィーヌに持参金が付けられない事情の一つには、彼女が三女であることが理由として予想される。男子の場合、次男以降は家督を継げないように、女子の場合、家に娘が何人もいたとして全員に均等に持参金を付ける余裕がないなら、後に生まれるほど持参金額が減ってゆくのは想像に難くない。『二人の若妻の手記』のルイズは、彼女に残されたお金を娘にそっくりやるのは惜しいと思った親によって弟に譲られる計画が立てられていた。そうなった場合、ルイズはデルフィーヌのように持参金なしに、『女の一生』のジャンヌの叔母リゾンのように修道院で過ごすこともある。持参金が大きな役割を持つ時代、このように、結婚に不利な要素を持っているデルフィーヌであったが、熱心にデルフィーヌを愛していたエミール・ド・ジラルダンと結婚することになった。彼は、「私生児で、剽窃新聞で財をなしたいわくつきの男<sup>99</sup>」であったが、デルフィーヌの筆禍事件で打ちひしがれる彼女を励ましたことや、彼に可能性を感じたソフィーも二人を結婚させることを漠然と考えていたようだった。

かくして結婚をすると、デルフィーヌはサロンを開き大成功する。彼女のサロンにはデュマ、ユゴー、バルザックなどロマン主義の最高といわれる文学者だけでなく、ギゾーやティエールなどの政界の大物も姿を見せた。寡黙でサロンを好まない夫にかわりサロンを切り盛りし、デルフィーヌは、「サロンの女主人として、客をくつろがせ、けっして退屈させぬ術

---

<sup>97</sup> 鹿島茂『新聞王ジラルダン』、筑摩書房(ちくま文庫)、1997年、69頁。

<sup>98</sup> 同上、69頁。

<sup>99</sup> 同上、76頁。

を心得ていた<sup>100</sup>」ようである。また、「Bien souvent, elle s'entremet entre Émile et Honoré sans parvenir à éviter la brouille finale.<sup>101</sup>」とあり、夫の周りの人間関係にも気を配っていた。確かに、バルザックはジラルダンの新聞に寄稿しているので、二人が仲たがいと、双方にとって不利である。二月革命時にジラルダンが反社会主義者として投獄された際、デルフィーヌは釈放を求めて直談判するなど様々な面で夫を支えた。しかし、ジラルダンは愛人を作り、愛人の子供をデルフィーヌに育てさせるなど彼女を裏切っていた。二人の関係も、「夫婦から友人の関係へ、さらに言えば戦友の関係へと変質<sup>102</sup>」していた。1855年デルフィーヌが胃がんで亡くなった後、ジラルダンは若いミナ・ブリュノーと再婚した。「人柄や才気の点ではデルフィーヌとはしよせん比較にならず、ジラルダンの家を訪れた旧友はミナのもてなしに例外なく失望したと言われている<sup>103</sup>」とあり、夫婦はその後まもなく、戸籍上は夫婦であったが別れてしまった。

デルフィーヌの結婚にはある理想形を見ることができる。夫の肩書にこだわらず自分を求めた人と愛のある結婚をしたと言えるし、ジャーナリストの夫と作家の妻ということであるので、自然な形で共通の友人と交流することができたこと、夫の裏切りに関しては終始忍耐の姿勢を持っていたことなどである。ゾラは「家庭の幸福という問題は、夫婦同士の寛容によってしか解決されえない<sup>104</sup>」と述べているが、デルフィーヌの忍耐が目立つ。しかし、夫婦のことは当事者にしかわからないので、ただデルフィーヌはゾラの「夫婦幸福論」を実践した人であるとだけ考えたい。

続いて、二人目はマリー・ダグー夫人 (Marie D'Agoult, 1805-1876)、旧姓フィラヴィニー、別名ダニエル・ステルン(Daniel Stern)である。彼女は結婚後、作曲家リストとの恋に走り「常軌を逸した情熱で、パリの最も由緒ある階級の中でもひとときわ輝かしい境遇を打ち壊してしまった。<sup>105</sup>」とある。彼女に常軌を逸する原因は新しい恋だけであったのだろうか。ここでは、マリーの人生全体には触れず、前哨戦とも言える彼女の結婚に注目したい。

マリーの父親は亡命貴族であり、母親は裕福なドイツ貴族であった。彼女は伯爵シャ

---

<sup>100</sup> 鹿島茂、前掲書、96頁。

<sup>101</sup> Balzac, *Correspondance*, t. I, Paris, Éditions Garnier Frères, p.759.

<sup>102</sup> 鹿島茂、同上、202頁。

<sup>103</sup> 同上、218頁。

<sup>104</sup> ゾラ『ゾラ・セレクション 10 時代を読む』、202頁。

<sup>105</sup> ドミニク・デザンティ『新しい女』、持田明子訳、藤原書店、1991年、14頁。

ルル・ダグー大佐と1827年に結婚する。

この結婚はあらゆる点で釣り合いのとれた縁組であった。母方のベトマン家からマリー・ド・フラヴィニーは三十万フランの持参金を得、さらに百万フランの遺産が期待できた。ダグー家はきわめて由緒ある貴族の家柄であり、婚約式には王家が参列した。伯爵は結婚生活の初めには、新妻にすっかり心を奪われていた。<sup>106</sup>

以上がマリーの結婚の様子である。この結婚は「申し分ない」結婚であると言ってよい。デルフィーヌとは違い、十分な持参金を付けられ、相手もまた申し分ない家柄の男性である。さらに、相手はマリーに心奪われているのである。しかし、マリーはこの結婚に満足ができなかった。夫のダグー伯爵は以下のように描写されている。

夢見がちで、いつも心の張りつめている若妻が抱いている憧れや希望や夢を彼は見抜けなかった。たとえ見抜けたにしても理解することはできなかったであろう。(…)妻の冷やかさに、やがては彼自身が抱かせている肉体的な嫌悪感に気付いたであろうか。<sup>107</sup>

おそらく、ダグー伯爵は『女の一生』のジュリアンに近いような振舞いをしたのではないだろうか。若い娘の持っている結婚の幻想をことごとく無視し、しかも強引な形で肉体関係を持ってしまったのだ。その結果、マリーは肉体的嫌悪感を抱くことになり「肉体的な失望が不感症となり、これが男性に対する怯えを生み出す<sup>108</sup>」ことになったと言える。しかし、この失望を解消すべく、『女の一生』でジャンヌがしたように生まれた子供に希望を持つ。「1828年、娘のルイーゼが生まれた時、マリーは愛の欲求を子どもに移そうとする。だが、女性にあって母性が本能的なものでないとすれば、何ができよう<sup>109</sup>」とあるように、子供に代償を求めることもできなかった。そして、年下の若い音楽家のフランツ・リスト (Franz Liszt, 1811-1886)と恋をして彼の子供を身ごもり、1835年にリストのもとへ向かう。マリーとデルフィーヌは友人同士だったが、デルフィーヌは浮気な関係など考えられない態度を

<sup>106</sup> ドミニク・デザンティ、前掲書 23 頁~24 頁。

<sup>107</sup> 同上、24 頁。

<sup>108</sup> 同上、24 頁。

<sup>109</sup> 同上、25 頁。

取ったという。デルフィーヌらしい態度ではないだろうか。

夫の元を去った後、リストとも別れ、ジラルダンをはじめとする多くの男性、女流作家ジョルジュ・サンドやデルフィーヌとの交流を持ちながら、名前を「ダニエル・ステルン」と改め作家としての活動をしている。『1848年革命史』(*Histoire de la Révolution de 1848*, 1851)を書き、社会と関わっている。しかし、当時フロラ・トリスタンらによって広まっていたフェミニズムに同調の立場を取っていない。では、彼女の生涯をみてみたい、

同時代の貴族階級の若い娘たちの誰よりも多く読み、体験し、フランスやドイツの詩人、音楽家、思想家たちと知己があり、自らも高い音楽的資質に恵まれ、美しく、優雅な女性。彼女は、社会に対する嫌悪感が精神や心を情熱に駆り立てる時代を生きた。

110

マリーは多くの本を読むこと、多くの知識を持つことで、社会に疑問を持っていた。結婚の失敗に加え、子供に対する先天的な母性というものがなかったことは興味深い。『ボヴァリー夫人』でエマは娘を産んだ後も子供に対して母性を感じさせる愛情を示さない。現代でも子供に愛情を感じず、育児を放棄する母親に対する社会の目は厳しい。本来感じるはずのものを感じなかった彼女はどれほど困惑し、絶望したのだろうか。マリーは結婚してから夫の元を去るまでの約8年間、どのような気持ちで結婚生活を送ってきたのだろうか。夫に肉体的嫌悪感を持ち、不感症に悩み、子供をかわいいと思えない事情は、たとえ他の女性が同じ悩みを抱えていたとしても、誰にでも相談できる事柄ではなく、耐えることしかできないように思われる。離婚が許されず、リストとの間に生まれた子供の戸籍上の母親になれなかった彼女の苦悩は、社会が作り出したものであるとあってよい。国家が想定する範囲のうちの生活を送ろうとする者に困難は少ないが、マリーのように、夫婦関係の悩みに対して「耐える」選択をしない者にどのように国家は対応してくれるのだろうか。

二人の書く女は、一人は夫と共に書き、もう一人は夫と離れて書いた。では、なぜ彼女たちは書くことをしていたのだろうか、デルフィーヌは環境が整っていたが、ダニエル・ステルンはなぜ作家になったのだろうか。

---

<sup>110</sup> ドミニク・デザンティ、前掲書、233頁。

Écriture-compensation, écriture-miroir : certes, pour bien des femmes comme pour bien des hommes d'ailleurs. Mais ces lieux communs masquent ce que peut signifier pour une femme le simple fait d'écrire, les difficultés, les interdits à vaincre.<sup>111</sup>

心の内に秘めた思いを打ち明けられない時、どんな種類の文章であれ書くことは自分を表現することができる。不妊に悩み、夫の裏切りに文句を言わなかったデルフィーヌが、文章を書くことでそのストレスを解消できていたとしたら、ダニエル・ステルンが胸の内に秘めた情熱や社会への思いを文章にしていたなら、純粋な文学的欲求がなかったとは思わないが、彼女たちにとって「書く」ことがある部分で心の支えになっていたとは考えられないだろうか。当時は識字率の低い時代で、誰でも字が書けるわけではなかったが、19世紀末になると、「l'enseignement secondaire puis l'enseignement supérieur s'ouvriront aux filles, les vocations se multiplieront.<sup>112</sup>」とあり、識字率が高まるにつれ、「書く」欲求を持つ女性はますます増えるのである。『二人の若妻の手記』では、手紙を「書く」ことで自分の生活を知らせるだけでなく、幸せに思っていること、不満などを女友達に打ち明けることをしている。

### 3.3 民衆における結婚

さいごに、民衆の結婚と家庭について触れたい。民衆に関してはある特定の結婚の例を挙げることはせず、全体的に見てゆく。まず、民衆における結婚観については以下のようであった。

家庭を築くことは社会問題の解決を準備することになる。(…)家庭をもたない男性は良い市民ではない。社会に対して負わねばならない第一の義務に背いているのである。(…)家庭生活が健全な感情を育み大きく伸ばすのに対し、独身生活はそれを消し去り腐敗させてしまう。<sup>113</sup>

このように、家庭を持たない、すなわち結婚しない者は社会的に良くないと言い切られて

---

<sup>111</sup> Jean-Paul Aron, *op.cit.*, p.219.

<sup>112</sup> *Ibid.*, p.219.

<sup>113</sup> ドニ・プロ『崇高なる者 19世紀パリ民衆生活誌』、見富尚人訳、岩波書店(岩波文庫)、1990年、266頁。

いることが分かる。労働者の女性はどうかであろうか、『居酒屋』のナナのように、若いうちから働いているが、彼女たちの結婚後はどうなるのであろうか。

Continueront-elles plus tard ? Si c'est le cas, elles essaient tout au moins d'arrêter quand elles ont la responsabilité de petits enfants qui exigent des soins de chaque instant, quitte à revenir ensuite à l'usine quand ils auront l'âge scolaire et à rester chez elles définitivement lorsque le salaire des enfants subviendra en partie aux besoins urgents.<sup>114</sup>

このようにみると、出産時には一時的に仕事を辞め、子供が大きくなると再び働き始める現代の多くの日本の母親たちと似たような労働行動であるように思われるが、夫が家族を養うのに十分な収入を得られない場合、女性も働くことになる。むしろ、子供を持ちながら働く女性労働者は少なくなかったことがわかる。今回は都市のケースを挙げており、工場で働くほか、お針娘、女中などの働く道があった。また、ちょうど『居酒屋』のナナのように若い女工が副業として売春まがいの行為をすることも少なくなかった。女性労働者が結婚する理由には以下のようなものがある。「 Il arrive que l'ouvrière, fatiguée d'une vie déréglée, craignant la vieillesse, épouse un ouvrier, ou parfois un petit fonctionnaire, ou un commerçant.<sup>115</sup> »この理由も、現代の日本の若い女性にしっくりくるものである。家が貧しいため、いつまでも未婚でいるわけにはゆかないという理由や老後のことなど、家族を作ればのちのち子供が面倒を見てくれるのではないかという期待も結婚する要因の一つであるようだ。確かに、年老いた女工が見られないわけではないが、女性労働者の雇用は不安定で、「 Un travail intermittent donc. Mais aussi, quand travail il y a, une activité sous-payée.<sup>116</sup> 」とあり、やめさせることもできるし、低賃金で働かせることができたのである。ともあれ、結婚すれば、働き手は二倍になり、万が一どちらかが失職しても、もう片方が働くことができるため、安定した生活になると言える。浮気者の夫、飲んだくれでお金を渡さない夫、暴力をふるう夫など問題のある夫に対しても、妻は対策をしなくてはならない。特に生活に直ちに影響する給料を渡さない夫にたいしては以下のような対策

---

<sup>114</sup> Jean-Paul Aron, *op.cit.*, p.65.

<sup>115</sup> Émile Zola, « Types de femme en France », in Nicole Priollaud (ed.), *La Femme au 19<sup>e</sup> siècle*, Liana Levi, 1983, p.31.

<sup>116</sup> Jean-Paul Aron, *Ibid.*, p.65.

がとられた。

妻の中には、夫に支配力を及ぼすことのできる者もいる。彼女たちは給料日になると、現金を直ちに受け取るために彼女の方から出向いてゆく。(…)きちんとした工場では、給料といっしょに氏名、日付、金額を明記した支払明細書が渡される。この事実を知っている妻は、夫に明細書を見せるように言う。<sup>117</sup>

しかし、明細書はたいていなくなっているか、偽造されており、夫婦の知恵比べは続くのである。このように、もちろんまともな夫も存在するが、手ごわい夫を持った妻は苦勞するだろう。しかし立場を変えてみると、このような夫は妻がいなくては、生活の面倒をみてくれる人も、仕事をさぼるのを叱ってくれる人もいなくなってしまう、それこそ生活が破たんしかねないのではないだろうか。19世紀のパリ民衆生活誌は妻の存在を以下のように表現している。

妻は家庭の魂であり基礎である。(…)彼女だけが本当に人を慰めることのできる者であり、失意の時にも立ち直ろうとする勇気を与えてくれることのできる者である。<sup>118</sup>

夫婦の機能をまとめると以下のように表わすことができる。夫は結婚をすることで守るべき妻や子供を得ることができる、また、妻は生活の面倒を見てくれ、働く意欲をもたらしてくれる。妻は結婚することで、守るべき子供と面倒はかかるが頼りにもなる夫を得ることができる。夫婦の共通の目的は子供を立派に育て、家を守ってゆくことになる。独身でいるより負担は増えるだろうが、助け合うパートナーを得ることができる。このように上手くことが運ぶ場合ばかりではないが、民衆においては特に、結婚の目的は「共に生活を営む者」を作ることであるように思われる。

本章では、19世紀に現実に生きた人びとの結婚の中からいくつかを選んだ。結婚に「平均的」という表現はふさわしくないように思われるが、あえて使うなら、「平均的」な貴族の結婚は第2章でバルザックをはじめとする作家たちが証言をしてくれたので割愛をし

---

<sup>117</sup> ドニ・プロ、前掲書、274頁~275頁。

<sup>118</sup> 同上、266頁。

た。この章では、人目をひく結婚、高級娼婦がロツシーニ夫人になる話や伯爵夫人が女流作家へ転身する話を例に挙げた。今までの事柄は「現実は小説よりも奇なり」と言わしめる結婚であり、19 世紀の結婚を一つの枠組みにはめ込むことが困難であること理解することができた。その中でも、19 世紀の特徴とも言えるナポレオン法典の結婚の影響や、女性と「書く」行為についての発見を得ることができた。

## 結論

この論文の目的は、「なぜ結婚が“描かれる”のか」を考察すること、そして、バルザックが述べた「あらゆる人間の知識のうちで結婚の知識がもっとも進んでいないのだということに、自分が真先に気づいたように思ったのである<sup>119</sup>」という言葉から、結婚について 19 世紀という特定の時代から普遍的な真理の一端を探し出すことであった。

第 1 章では、バルザック『結婚の生理学』をもとに、19 世紀の問題「不貞」を結婚生活における「病」と仮定し、夫が妻を浮気に走らせない方法、すなわち夫婦生活を円滑にする方法を観察した。それには、相手をよく「観察」し、「理解」するよう努めることが不可欠であることがわかった。『結婚の生理学』の趣旨は「夫婦の幸福と不幸に関する折衷哲学考察」であり、またゾラの言葉から、相互理解と折衷が結婚生活における鍵であるという理論を学んだ。

第 2 章では、19 世紀の文学作品に取材し、結婚生活における三つの局面、「少女時代と教育」「夫婦という単位」「子供」について分析した。『女の一生』から、19 世紀フランスにおける学校や家庭での女子教育が花嫁を無知なまま結婚させ、夫側の「無理解」が夫婦関係を悪いものにする原因になりうること、『二人の若妻の手記』などから、当時の貴族社会では夫婦が「愛によって結ばれた二人」ではなく、家系や資産を守るために結び付けられ、夫婦として振る舞うことを義務付けられた「単位」であることがわかった。そして、子供の存在が夫婦の関係を変化させること、夫との関係に悩む妻の感情のはけ口として子供を溺愛する方法があるとわかった。また、階級によって、家族観や子供観の違いがあること、19 世紀はそういった価値観が変化する時代であったことが明らかになった。

第 3 章では、19 世紀の現実の人びとの結婚に取材した。二人の高級娼婦、二人の「書く女」を例にとり、彼女たちが生きた時代の法律、娼婦が伯爵夫人になった例、ジャーナリズムという新しい文化に挑む夫婦の姿など取り上げた。また、第 2 章で明らかになった夫婦の問題である肉体関係に関する問題が現実の夫婦に起こったことがわかった。民衆においては、現代の日本でも見られるような結婚事情、給料の管理をめぐる夫婦のやりとりなどを見た。そして、生活を共にするパートナーとして、不完全な者同士である男

---

<sup>119</sup> バルザック『結婚の生理学』、11 頁。

女が結婚し夫婦になる意義を明らかにした。

第2章と第3章で重なる部分があったこと、実在の人物が文学作品のモデルになっていることから、文学は虚構であるが、その内容は時代の有力な証言者となることがわかった。作家たちが結婚のテーマを多く取り上げたのは、19世紀という時代が変革に富み、家族観の変化やナポレオン法典の制定で結婚に関わる法律が変わったことで例えば離婚ができないこと、妻の権利が弱くなり、『ゴリオ爺さん』見られるような、財産に関わる問題が社会共通の関心になったことではないだろうか。また、人間の人生を描くにあたり、するとしても、しないとしても、「結婚」は欠かせない段階であることも理由であると考えられる。結婚という「契約」を結ぶことで、人生は大きな変化を迎えることになる。変わりゆく社会の中で、変わらない人間の欲望や、結婚への夢、家族の幸福、そして人生における諦めを描くにあたり、結婚という題材は適していると言ってよいだろう。

そして、われわれが19世紀の結婚の例から現代にもつながる真理を探しだすとするならば、まず、結婚するならば気にいった相手とするのがいいということだ。今や当たり前のことのようにだが、今まで取り上げてきた19世紀の夫婦たちで、相思相愛で結婚した夫婦は少なかった。あらゆるメディアが「恋愛至上主義」を推進する現代では、かつてほど難しいことではないように思われる。そしてやはりバルザックの、「愛とは欲求と感情の一致であり、結婚における幸福とは、夫婦の間の、魂の完全な和合から生まれるものである<sup>120</sup>」という言葉借りるのが一番ふさわしいようだ。この真理は他人同士だった男女が魂を一つにさせるのだから、非常に困難なことであると言えるし、そうできる夫婦はまれであろう。しかしもっと簡単にこの真理を説明したゾラの、「二人の人間が絶えずいっしょに暮らすことはたいてい不愉快なものだから、お互いに寛容にならなければならない<sup>121</sup>」という言葉引用したい。もともと他人なのだから、不都合は承知で結婚に臨むべきであるということだ。

フランスでは、1999年、連帯市民協約<sup>122</sup>(PACS : Pacte Civil de Solidarité)が制定された。これは新しい家族の形である。同性にも認められ、カップルの一方の意思で解消できるので、19世紀の社会や人びとにとってはほとんど意味を成さない制度であろう。男女平等が進み、男女ともに自立した生活ができるようになった現代で、結婚生活が上手

<sup>120</sup> バルザック『結婚の生理学』、56頁。

<sup>121</sup> ゾラ『ゾラ・セレクション 10 時代を読む』、201頁~202頁。

<sup>122</sup> 同性または異性の成人2名による、共同生活を結ぶために締結される契約のこと。結婚よりは規則が緩やかで、同棲より法的権利を享受できる制度。

くいくか以前に結婚しない選択をする人も増えてきた。そして結婚の形もパックスのように変化しつつある。その中で結婚をする意義は何かを問われた時、われわれは何と答えるだろうか。どのような時代にあっても、『創世記』にあるように、不完全な状態で生きる人間にとって、「助けあう者」の存在は必要であり、そのために人間は結婚の「不都合」に文句をつけ、時には文学のテーマに、国をあげて論議しながら長い間この制度を保ち続けてきたのではないだろうか。現代ではその「助けあう者」を異性に限定しないなどの幅が広がってきたが、二人の人間が一緒に暮らす制度を結婚とする限り、この制度に関する論議は形や内容を変えながら永遠に続いてゆくに違いない。

## 参考文献リスト

### 1 文学作品

#### 1.1 邦文

ゾラ『居酒屋』、古賀照一訳、新潮社、2007年。

〃『ゾラ・セレクション 8 文学論集』、佐藤正年編訳、藤原書店、2007年。

〃『ゾラ・セレクション 10 時代を読む』、小倉孝誠ほか編訳、藤原書店、2002年。

バルザック『ゴリオ爺さん』、平岡篤頼訳、新潮社(新潮文庫)、1963年。

〃『谷間のゆり』、宮崎嶺雄訳、岩波書店(岩波文庫)、1994年。

〃『バルザック全集 2』、安土正夫・吉田幸雄訳、東京創元社、1973年。

〃『バルザック全集 16』、鈴木力衛訳、東京創元社、1979年。

〃『バルザック全集 26』、伊藤幸次・私市保彦訳、東京創元社、1976年。

〃『風俗研究』、山田登世子、藤原書店、1992年。

フローベール『ボヴァリー夫人』、生島遼一訳、新潮社(新潮文庫)、1985年。

モーパッサン『女の一生』、永田千奈訳、光文社(光文社文庫)、2011年。

#### 1.2 欧文

Balzac, *Correspondance*, t. I, Paris, Éditions Garnier Frères, 1960.

—, *Correspondance*, t. V, Paris, Éditions Garnier Frères, 1969.

—, *La Comédie Humaine*, t. I, Paris, Gallimard, 1983.

—, *La Comédie Humaine*, t. II, Paris, Gallimard, 1971.

Flaubert, *Œuvres*, t. I, Paris, Gallimard, 2001.

### 2 研究書

#### 2.1 邦文

饗庭孝男ほか編『新版 フランス文学史』、白水社、2008年。

フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』、杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、1981年。

稲本洋之助『フランスの家族法』、東京大学出版会、1985年。

- 江川英文編『フランス民法の150年(上)』、有斐閣、1957年。
- 鹿島茂『明日は舞踏会』、作品社、1997年。
- 〃『職業別パリ風俗』、白水社、1999年。
- 〃『新聞王ジラルダン』、筑摩書房(ちくま文庫)、1997年。
- 〃『パリが愛した娼婦』、角川学芸出版、2011年。
- 〃『パリ、娼婦の館』、角川学芸出版、2010年。
- 小山美沙子『フランスで出版された女性のための知的啓蒙書に関する一研究』、溪水社、2010年。
- アラン・コルバン『娼婦』杉村和子監訳、藤原書店、1991年。
- 坂本千代『マリー・ダグー』、春風社、2005年。
- マルチヌ・セガレーヌ『儀礼としての愛と結婚』、片岡幸彦・片岡陽子訳、新評論、1985年。
- 〃『妻と夫の社会史』、片岡幸彦監訳、新評論、1983年。
- ドミニク・デザンティ『新しい女』、持田明子訳、藤原書店、1991年。
- ミレイユ・デルマ＝マルティ『結婚と離婚 フランス婚姻法入門』有地亨訳、白水社、1974年。
- ドニ・プロ『崇高なる者 19世紀パリ民衆生活誌』、見富尚人訳、岩波書店(岩波文庫)、1990年。
- 日仏女性資料センター編、『女性空間 第10号』、日仏女性資料センター、1993年。
- 日本バルザック研究会、『バルザック 生誕二百年記念論文集』、駿河台出版社、1999年。
- 浜本隆志ほか『ヨーロッパ・ジェンダー文化論』、明石書店、2011年。
- アルフレッド・フィエロ『パリ歴史事典』、鹿島茂監訳、白水社、2000年。
- ミシュリーヌ・ブーデ『よみがえる椿姫』、中山真彦訳、白水社、1995年。
- 古屋健三ほか編著『19世紀フランス文学辞典』、慶應義塾大学出版会、2000年。
- フランス教育学会『フランス教育の伝統と革新』、大学教育出版、2009年。
- サビーヌ・メルシオール＝ボネほか『不倫の歴史』、橋口久子訳、原書房、2001年。
- 松澤和宏『「ボヴァリー夫人」を読む』、岩波書店、2004年。
- 道宗照夫『バルザック「人間喜劇」研究(一)』、風間書房、2001年。
- フランソワ・ルブラン『アンシアン・レジーム期の結婚生活』、藤田苑子訳、慶應義塾大学

出版会、2001年。

アントワーヌ・レオン『フランス教育史』、池端次郎、白水社、1975年。

## 2.2 欧文

Jean-Paul Aron, *Misérable et glorieuse la Femme du XIX<sup>e</sup> siècle*, Paris, Éditions Complexe, 1984.

Anne Martin-Fugier, *La bourgeoise*, Paris, Bernard Grasset, 1983.

James F. McMillan, *France and Women 1789-1914*, London, Routledge, 2000.

Nicole Priollaud (ed.), *La Femme au 19<sup>e</sup> siècle*, Liana Levi, 1983.

## 3 論文・雑誌

### 3.1 邦文

高岡尚子「19世紀フランス文学に読む『女性と結婚』」、『奈良女子大学文学部研究教育年報第2号』、2006年、123-133頁。

村田京子「恋愛結婚と政略結婚の行く末」、『大阪女子大学女性学研究資料室論集14』、2007年、1-26頁。

### 3.2 欧文

Fujiwara Dan, « La question de la famille dans la Comédie Humaine : Hypothèses et perspectives », In *Cahiers d'études françaises* Université Keio, 2001, No.6, pp.40-53.

Chantal Maury, « Balzac, Olympe Pélissier et les courtisane de "La Comédie Humaine" », *L'Année Balzacienne* 1975.